

フランス語版『資本論』をめぐる若干の話題について

櫻井 毅

1

以前、やはりこの『武蔵大学論集』に、旧制の武蔵高校の卒業生で長らく横浜国立大学の教授をされていた杉本俊朗名誉教授の没後、その杉本教授が本学の名誉教授平田美和子先生の父君であるというご縁から、その残された膨大な蔵書の中から本学図書館に David Ricardo の *On the principles of political economy, and taxation*, 1817, つまりかの理論経済学の創始者リカードの「経済学原理」の初版という稀覯本のご寄贈を頂いたことに関連して、「D. リカード『経済学と課税の原理』初版発刊まで」と題する、『原理』執筆に至る経緯と執筆過程における困難とその克服および友人 James Mill の助言の役割などを記した拙論を、<『原理』刊行 200 年記念>として執筆させてもらったことがあった。ただ、その時頂いた本は実はほかにもあって、今回はさらにその中の一冊、つまりこれもかの偉大なカール・マルクスの『資本論』のフランス語版初版という稀覯本であり、ご寄贈を受けてすでに三年以上経過してはいるが、それについても、この度ここで書かせていただきたいと考えたのである。それは *Le Capital par Karl Marx, Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur, Paris, Éditeurs, Maurice Lachatre et C^{ie}* で、扉頁に発行年号の記載がないのは、もともとそれが 1872 年 9 月から 1875 年 11 月にかけて各 8 ページの小分冊を 5 冊に束ねた形で 9 回、九つの巻に分けて発売されたという経緯によるものだったからであろう。それがほぼ同時に 1872 年 7 月から翌年の 6 月まで一年をかけ、やはり 9 巻に分けてドイツで発行された本来のドイツ語版の第Ⅱ版と同様に分冊の形で発行されたのは、もちろん読者に廉価で届けたいとする出版社の意図によるものであろうが、そして実際、フランス語版の最初の分冊は 1 万部刷って 8000 部売れたという話もあるが、その後のことは情報がない。それが成功であったのかどうかはドイツ語版第Ⅱ版の場合と同様分らないが、パリ・コンミュン敗退の直後と思えば人々の社会的関心が高まっていた時期との関連は想像できる。興味あるエピソードとして、第 1 分冊にマルクスの肖像を入れたという出版者ラシャトルの強い希望を満たすために、写真を撮ってそれを木版

に彫って肖像画にする工程に時間がかかり発行が非常に遅れてしまった、というマルクスの娘ジェニーの証言がある（『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店、③、581 頁）。確かにダゲールがカメラを発明してから三十年、そして画期的な写真乾板が開発されたばかりの時期である。時間を要したのも当然だろう。発行部数は各巻 1000 部と言われている。各巻がさらにまとめられて一冊になってからのフランス語版の発売部数との関係は分からない。ちなみに 1867 年のドイツ語版初版は 1000 部、1872（～73）年の第Ⅱ版は 3000 部だったという。

あらためて言うまでもないが、ご寄贈いただいたこの貴重なフランス語版『資本論』の持つ歴史の重みを思うと、武蔵大学図書館の稀覯書コレクションの厚みがさらに一段と増したことは慶賀すべき事実である。

ところでこのフランス語版の発行出版者のラシャトルは最後の 9 巻目を発行するときに、フランスの反動的な性格の強い第三共和国の臨時政府によってその出版権を取り上げられ、アドルフ・ケーという右翼的な法定管理人にその権利は引き渡されてしまったという。反王党派のラシャトルは王党派の勢力の強い初期の反動的な第三共和国政府に追放されてしまったわけだが、仕事を引き継いだケーはあらゆる手段で出版の延期をもくろんだものの、結局、ケーはラシャトルの代理人にすぎないことをマルクスに法的に追及されて、最後の第 9 巻もなんとか刊行されることになり、全体が最終的にはさらに一冊の本にまとめられて出版される運びとなった。本学図書館が杉本教授のご遺族からお贈りいただいたものがまさにその中の製本された一冊であって、これは杉本教授の斡旋、協力と極東書店の努力によって日本で 1967 年にフランス語版『資本論』が復刻刊行された際に原本となったものでもある。

後日談としては、恩赦によりパリに戻って出版に復帰したラシャトルは、その後、事業を使用人だったオリオールに譲るのだが、フランス語版『資本論』についても今度はオリオールが引き継ぐことになる。それにも少し触れておこう。

オリオールは社会主義者のグループの一員でマルクスやエンゲルスなどとも面識があったようで、マルクスと

は手紙のやり取りも行っている。オリオールはマルクスにフランス語版の『資本論』の手持ちの分冊の中で欠けてしまっている部分について、その購入を依頼されていたりしていた。もちろんそういう問題だけでなく、実は、第9巻についてはラシャトルが追放されてしまったために、代わったケーが最後の第9巻を構成する最終分冊については刊行を遅らせただけでなく、今までよりは少ない部数しか印刷しなかったために、第9巻に充てるべき最終分冊以外の諸分冊だけがかなり残ってしまっていて、その分、第9巻が完成できないままになっているという事情をもオリオールは引き継いでいた。そこでオリオールは、新たに欠けていたその最後の分冊部分だけを印刷して第9巻分の分冊を全部揃え、その上で第9巻自体の増刷を図りたいと考えるに至った。折しもフランス語での『資本論』の抄訳が出版されて『資本論』自体への社会の関心も高まっていた。オリオールはさらに以前ラシャトル社で刊行したフランス語版『資本論』の復刊を思い立ち、1895年、マルクスの死後になったが、フランス語版『資本論』の再版を自ら果たしたのである。それはラシャトル版の原版を用いたもので、判型、頁数はすべて同じだが、ただ初版の巻頭にあったマルクスとラシャトルとの書簡を省略したり、分冊からとった扉絵が初版と違っていたりするなどの異同があり、そのため、オリオール版と呼ばれる異本になっているとのことだが、これは筆者が現物を見ていないので、伝聞によるものである。

2

本書の初版刊行時の興味あるエピソードについて多少述べたが、その中身はほとんど恩師鈴木鴻一郎先生の所説の受け売り^(注)で、実は、本書が特に注目されるのは、フランス語版をめぐる出版事情ではなくて、そのフランス語版の内容の方でなければならない。話題をそちらに移すことにしよう。

(注) 鈴木鴻一郎『資本論偏歴』日本評論社1971年、I-13「フランス語版『資本論』異本ものがたり」参照。

ドイツ人であるカール・マルクスがその著『資本論』をドイツ語で執筆しているのは当然かもしれないが、彼自身が手を入れた『資本論』各版の中で最後に大幅な改訂を試みたのが、このフランス語版であったことは十分知られているとは言えない。もっとも彼自身が出版したのは、実際は『資本論』の第一部だけであって、あとの第二部、第三部は、マルクスの死後、その残された原稿をエンゲルスが校訂編集した上で出版したものであり、マルクス自身のものとは必ずしも言えない。そういう観点から言うと、マルクスが出したのは『資本論』第一部

だけで、それらはドイツのハンブルクのマイスナー出版社から刊行された1867年の初版、そして同じくマイスナー社から1872年から翌年にかけて9分冊で順次発行され、さらに現在一般にみられるように一冊に合本され1872年発行と扉頁に印刷された第Ⅱ版、そしてさらにその第Ⅱ版を基にジョゼフ・ロアによってフランス語に翻訳され、さらにマルクス自身によって校閲され部分的に修正されて、パリのラシャトル出版社から刊行されたフランス語版の三冊だけである。但し正確にはフランス語版を準備の時、まだその底本となるべきドイツ語の第Ⅱ版の現物は印刷されておらず、ロアの翻訳作業はマルクスの草稿からのものだったと伝えられている。さらにボルドーの中等学校の教員で貧乏なロアは、悪筆で名高いマルクスの草稿について質疑するためにロンドンまで行くこともできなかったといわれている。しかも第Ⅱ版とフランス語版の仕事は実際には、同時並行的にマルクスによって作業が進められ、ドイツ語版第Ⅱ版が出版されたのちにも、なおフランス語版による改訂作業は継続されていたのだ。ともあれロアによってフランス語に翻訳された第Ⅱ版の原稿は、フランス語版の扉に印刷された表題の後ろの方に「著者にとって全面的に改訂された」と断り書きが付け加えられていることで明らかのように、マルクス自身によって徹底的に書き直され、その断り書きは「決して常套句ではなく、そのことでは自分は大変な骨折りをした」(大月書店版『マルクス＝エンゲルス全集』^③、399頁)と、友人に手紙で知らせているほどであった。あるいは娘ジュニーが述べているように、「フォイエルバッハの翻訳で大成功をおさめた翻訳者ロア氏の名声から私たちが期待していたほどにはよくない」(同上、582頁)という事情があったのかもしれないが、結局、マルクスによって、ロアのフランス語の訳文そのものをも含めて厳重に見直され手が加えられ、いわば底本のフランス語への翻訳であるにとどまらず、底本から離れた新しい版本として1872年から75年まで分冊での刊行が続き、最終的に一冊に取りまとめられたフランス語版の初版こそが、マルクス自身の手による最後の版本であり、結局、この三種類しかマルクス自身は出版していないことになる。注意すべきはフランス語版『資本論』はただフランス語に翻訳された『資本論』だと考えてはならないということであり、フランス語で発表された新しい版の『資本論』だということである。「僕はそこでかなり多くの新しいことを追加し、また多くの箇所を本質的に書き直した」(『マルクス＝エンゲルス全集』^④、237頁)と、マルクス自身のちに語っている。なお、その間、1872年3月にロシア語版『資本論(初版)』もいち早くペテルブルクで出版されている。はじめロシ

ア語翻訳に手を付けたゲ・ア・ロパーチンのあとを継いだエヌ・エフ・ダニエリソンが手紙を書いて、マルクスに訂正箇所を知らせてほしいと連絡した時、マルクスは多忙で要望に応ずることができず、ただのロシア語翻訳版にとどまっている。結局、自らのドイツ語版の第Ⅱ版が出版されるまで改訂はどこでも実現されていなかったのである。ドイツ語第Ⅱ版（1872年7月～）、フランス語初版（同年9月～）とほとんど同時期に最初に出版されたロシア語版（同年3月）ではあるが、それは、もちろんマルクスを大いに喜ばせた。だが、もともとはマルクスのあずかり知らぬところではじまった計画であり出版であった。

話は戻るが、結局、逆に言えば、フランス語版以降の版は、マルクス以外の人の手が入っている可能性があるということだ。つまりそれ以後の版にはエンゲルスの手が入っている事実があるとすれば、マルクスが自らの手で校閲した最後の『資本論』がフランス語版だったということだ。実際マルクスはいろいろな手紙の中でフランス語版が自分にとって最終的なものであることを力説している。

実際には、マルクスは第Ⅱ版の出版のあと、1881年に入って、出版社のマイスナーから第Ⅲ版の出版の打診を受けるのだが、それはマルクスにとって不都合な時期だった。もともとフランス版に加えた補足などを含むさらなる改訂決定版としての第Ⅲ版を自身の手で出版するつもりでいたのだが、『資本論』第一部に続く第二部などの原稿の執筆に追われ、しかも健康も損ねていたために、第Ⅲ版どころではなかったのだ。もしやるとしても最小限の追加にとどめ、そのあとの第Ⅳ版で「同書を改作する」（『マルクス＝エンゲルス全集』③⑤、206頁）と考えたりしていた。しかし、それは結局、いずれも実現できなかったのである。その結果、マルクスの死後、その遺志を継いでエンゲルスは『資本論』の第Ⅲ版（1883）と、さらに若干の訂正を含む第Ⅳ版（1890）までを刊行したのだが、その中にはもちろんマルクスがフランス版に加えた修正は取り入れられている。大部分は第Ⅲ版で、残る若干は第Ⅳ版で取り入れられているが、ただ実はそれはすべてではなく、エンゲルスが取捨選択している場合が多い。マルクスの修正に表現自体の平易化が多く含まれていることは確かだとしても、マルクスのおこなった最後の修正にこそ最大の興味があり、フランス語版の独自の重要性がそこにあるといわれていることを考えると、エンゲルスのやり方にはいささか腑に落ちないと感じることもあってもおかしくはないだろう。

それではそのフランス語版の特徴はどこにあるのだろうか。全体の構成はもちろん基本的にはドイツ語版の第

Ⅱ版に従っている。それはフランス語への翻訳がもともとドイツ語版第Ⅱ版の原稿を底本としていたから当然であろう。ただ前述したように、ドイツ語版の改定作業とフランス語版の作成の仕事はかなりの部分で重なっていた。マルクスはフランス語版でかなりの訂正や加筆を行っている。そしてそれは当然ドイツ語版の改定が終わった後にもかなりの期間続けられていたのである。フランス語に堪能であったマルクスはロアの訳文自体もずいぶん修正しているようだが、内容的にはそれはほぼ「蓄積論」に集中しているといつてよいであろう。「フランス語版にふくまれているいちばん重要な変更は、……蓄積にかんする諸章に、みいだされます」（『マルクス＝エンゲルス全集』③④、104頁）と、マルクス自身も語っている。ドイツ語第Ⅱ版での初版に対する改訂が、[付録]の「価値形態」を省いてその内容を実質的に本文に吸収させ、さらに第5章を二つに分けて「賃金」論を独立させて第6篇にしたことを含めて、全体の章別構成を篇別に変更するなど、かなり大幅な修正という印象を受ける割に、概して修正は形式的な修正である印象が強いのに対して、フランス語版では、ドイツ語『資本論』第Ⅱ版の第7篇をさらに分割して「原始的蓄積」論を独立させて第8篇を新たに設けたことが編成上大きな修正だが、他は概して内容の表現についての平易化を目指したものが多くような感じもある。ただ興味深いのは、ドイツ語版第Ⅱ版においてもマルクスはすでにその原始的蓄積論の内容をかなり書き直しており、とくに初めの方で書き直しが多く、全体として[注]の中身の変更や新しい[注]の追加も含めてかなりの加筆があるということである。ところがマルクスはそれに加えてフランス語版の第8篇でさらに平易化のために加筆修正を加えているのが一層興味深く感じられるのである。マルクスがのち、エンゲルスに依頼されて彼の『反デューリング論』に寄稿する予定の重農主義学派の説明に関連して、「僕はそれらの箇所をフランス語版から引用しておく。というのは、それらの箇所は、フランス語版では、ドイツ語の原文のなかにあるのと比べて、単に示唆的でしかないということがより少ないからだ」（『マルクス＝エンゲルス全集』③④、35頁）と、エンゲルスにあてた手紙のなかで書いているのは、その辺のニュアンスを伝えるものといつていいだろう。フランス語版の修正が蓄積論のあたりに集中しているとすれば、それは場所的についてドイツ語版第Ⅱ版の校閲が済んだ後の時期での修正ということになったはずだから、両者にかかなりの違いが生じてもおかしくはない。

マルクスはフランス語版を完結するにあたって、「読者へ」という[あとがき]とドイツ語版第Ⅱ版に付した

「後記」の抜粋を、フランス語版の最後に掲載している。第Ⅱ版の「後記」で紹介されたロシア語版における弁証法の問題を扱ったカウフマンの書評に対するマルクスの高い評価とロシア語版『資本論』出版への感謝の気持ちもさることながら、フランス語版1875年4月28日付けの「読者へ」と題する[あとがき]の方は、フランス語版の成立事情を説明している点で興味深い。すなわちこういうのである。——「J. ロア氏は、できるだけ正確な逐語的でさえある翻訳をしようと約束した。彼は自分の課題をきちょうめに果たした。ところが、彼のきちょうめんそのもののために、私は読者にもっとわかりやすくする目的で彼の訳文を変えざるをえなかった。この手直しは毎日行なわれたが、本書が分冊で刊行されたために、同じように注意深く行なわれたわけではなく、文体の不統一を産まざるをえなかった。

「ひとたびこの校閲の仕事に着手してからは、私は、底本にした原本（ドイツ語第Ⅱ版）にも改訂を加えることになってしまった。すなわち、幾つかの叙述を簡単にし、他の叙述を完全し、歴史的または統計的材料を追加し、批判的な洞察をつけ加えるなどした。このフランス語版の文章上の欠陥がどうであろうとも、この版は、原本から独立した科学的価値をもっているのであって、ドイツ語に日常親しんでいる読者でさえ、座右から離してはならない」（江夏美千穂・上杉聰彦訳『フランス語版資本論』下巻、法政大学出版会1979年、471頁）と。なお、ここでは、フランス語版の校閲の時期とドイツ語版Ⅱ版の校閲の時期との順序が前後逆になっているようだが、いずれにしても、両者が並行的に行われた事実を明らかにするものといえよう。

あとで紹介する日本におけるフランス語版『資本論』研究の第一人者である林直道氏による説明は、ドイツ語版『資本論』第Ⅱ版との相違点に多少の言及はあるものの、その第Ⅱ版自体におけるマルクスの改訂作業には触れずに、フランス語版の改訂だけを取り上げて説明しているくらいがあるように思われる。それではフランス語版における修正は唐突に過ぎるのではないか。マルクス自身『資本論』第Ⅱ版の「後記」の中で次のように書いていた。——「あちこちに見られる本文の書き改めは、文体に関するだけのものも多く、いちいちこれに立ち入ることは無用であろう。このような書き改めは本書の全体にわたっている。それにもかかわらず、パリで分冊で刊行されつつあるフランス訳を校訂するにあたって、私は、ドイツ語原文のいくつかの部分について、ある個所ではもっと徹底的に書きかえることが、他の箇所では文体をもっと改めることが、あるいはまたときどきある書き違いをもっと入念に取り除くことが必要だったと感じ

ている。それをやるためには時間がなかった、というのは、本書が売り切れになっていて1872年1月にはもう第Ⅱ版の印刷に取りかからなければならないという知らせを私が受け取ったのは、やっと1871年の秋のことで、差し迫った別の仕事をやっているさいちゅうのことだったからである」（国民文庫版『資本論』①、29頁）と。

これを見ても分かるように、初版の改訂とフランス語版への翻訳作業は一部同時的な部分をも含みながらほとんど連続的作業といった方がいいと思われるほどだ。「マルクスは『資本論』のドイツ語第Ⅱ版およびフランス語初版の仕事に没頭している」（『マルクス＝エンゲルス全集』③、402頁）と、エンゲルスも当時のマルクスの近況を伝えている。実際、フランス語版の出る直前のドイツ語版第Ⅱ版におけるさらなる改訂への切迫した思いを知ってこそ、フランス語版の蓄積論への執着と執筆責任からくる訂正補筆の意欲が理解できるのではあるまいか。確かに、フランス語版を訂正しながら第Ⅱ版の改訂を行っているという事実は、マルクスの言葉から十分うかがわれるといてよい。そしてドイツ語版の『資本論』の出版が分冊形式で約一年かかって終了した後、フランス語版の出版はその後も三年続いていたのであって、その間にもマルクスはフランス語版への補正の手を休まなかったのである。マルクスの補正の手が一番顕著なのは、マルクス自身が指摘しているように、最後の方の「原始的蓄積論」であったことを考えればさらに合点がいくであろう。

エンゲルスによると、蓄積論はマルクスの修正の筆が一番加えられたところであると思われるにもかかわらず、マルクスの原型が一番残っているところだそうだ。エンゲルスはマルクスの死後、自らが校閲して出版した『資本論』第Ⅲ版への前書きで、フランス語版での修正が最後の蓄積論に偏っていることを指摘したのち、次のように述べている。——「これより前のほうの諸篇はもっと根本的に加筆されていたのに、この篇では従来の本文は他の箇所以上に最初の草案に従っていた。それゆえ、文体は他の箇所より生き生きとしており、より一貫したものだったが、しかしまた、よりぞんざいで、英語ふうの語法も混じっており、ところによっては不明瞭でもあった。展開の筋道にはあちこちに間隙が見られた。というのは、いくつもの重要な契機がただ暗示されていただけだったからである」（国民文庫版『資本論』①、47頁）と。先に引用したマルクスのフランス語版の最後に付した「読者へ」の訴えは、まさにフランス語訳の仕事とドイツ語版第Ⅱ版の改訂作業が並行的であったことを示していた。ただフランス語版の改訂の仕事の方が、

先にも記したように、ドイツ語版第Ⅱ版より長く継続的に行われていたということだ。マルクスを誰よりも知るエンゲルスには、エンゲルスらしい深い感慨がマルクスの施した文章の修正それぞれにもあったことがうかがわれるのである。

私はかなり以前のことだが、マルクスがその『資本論』の原始的蓄積論でイングランドにおける農業資本家の形成を結構詳しく論じているのに改めて気づき、しかもその16世紀に現れる元来は農奴でやがて農業経営者になるベイリフも概念的には産業資本家であるとわざわざマルクスが注記して強調していることを知って、非常に大きな刺激を受けたことがあって、その問題はのちに『資本主義の農業的起源と経済学』（社会評論社、2009年）にまとめて上梓したが、その折、『資本論』の初版の記述に戻って、その主張がもとのものから変わっていないことを確認したことがある。その時たまたま気づいたのが、『資本論』の原始的蓄積論にしばしば見られた現行版（『マルクス＝エンゲルス全集』版）と初版の叙述の違いであった。主旨は変わらないとしても叙述や表現に結構違いがあるということで、それは蓄積論で顕著であったように記憶する。現行版の『資本論』はエンゲルスの改訂による第Ⅳ版が底本になっているはずだが、我々は今日簡単に読めるのはその現行全集版（*Marx=Engels Werke*, Dietz Verlag）と初版、第Ⅱ版およびフランス語版の日本製の復刻版である。あとの第Ⅲ版については、手元に現物を置いてみるのが簡単ではないので、なかなか各版を全て比較対照して調べる機会がないのが実情だ。いずれにしても、初版と第Ⅱ版、それにフランス語版のそれぞれについて、もう少しその異同を丹念に調べてみる価値はあるだろうと思う。特に初版と第Ⅱ版との相違と第Ⅱ版と第Ⅲ版ないし現行版との相違は、小さな言葉の表現なども含めてさらに詳しくその違いとその違う意味が検討されなければならないと考えている。少なくとも、フランス⁵語版『資本論』の翻訳者の「訳者解題」におけるエンゲルスの杜撰な改定作業に対する疑問などから察すると、十分検討の余地が残されていると考えなければならないだろう（江夏・上杉訳『フランス語版資本論』上巻、「訳者解題」参照）。

記憶がすっかり薄れてしまった今でも、この点をさらに検討したいという多少の意欲はないではないのだが、とってみたいところで、現在のCOVID-19騒ぎで、図書館の利用も全くできない状態では是非もない。手元の蔵書も大部分処理してしまったので比較研究しようにも全く不便の上もないのだから、所詮、意欲といっても、実現困難な米寿も超えた老人の繰り言にすぎない。

3

さて、フランス語版『資本論』の特徴の所在に簡単に触れてみたが、もともとその内容を詳細に論じようというのがこのエッセイの目的ではないので、ここではその詳細は先学のフランス語版『資本論』研究の権威林直道氏にお任せすることにしたい。氏はすでにフランス語版とドイツ語現行版との比較について、詳細な研究書『フランス語版資本論の研究』（大月書店1975年）および解説付き翻訳書『マルクス資本論第一巻フランス語版』（大月書店1976年）を発表されていて、その詳しい相違点の指摘において、これ以上の成果は今後もなかなか出てこないだろうという事情があるためである。興味のある方はまずそちらが参考になる。もっとも、ここまで言うておいて、あとは林氏の研究にすべてをゆだねてこれ以上何も言わないというのは、あるいは読者に失礼かもしれないので、一言だけ気づいたことに触れておくことにする。

それはこういうことである。林氏も取り上げていることだが、本源的＝原始的蓄積の過程がどこの国でも同じように経過するののかという問題で、マルクスは初版の文章に加筆し、西ヨーロッパの国々を対象に取り上げて、次のようにフランス語版で書いていることだ。

「本源的蓄積の歴史においては、形成途上にある資本家階級の進出にたいして楨杵として役立つ変革は、すべて時代を画するものであるが、なかでも、大衆からその伝統的な生産手段および生存手段を奪うことによって、彼らをいきなり労働市場に投げ出す変革こそは、とりわけ画期的なものである。ところがこうした発展すべての基礎をなすもの、それは耕作農民の収奪である。

「この収奪が徹底的な仕方で行われたのは、今のところまだイギリスにおいてだけである。したがってわれわれの素描においては、当然、この国が主役を演じるであろう。だが西ヨーロッパの他の国々もすべて同じ運動を通過しているのであって、ただ異なるのは、この運動は、環境によって地域の色合いが変わり、あるところではそれがより狭い範囲に閉じ込められたり、あるところではあまり目立たない特徴を示したり、またあるところではちがった順序をたどったりすることだけなのである」（前掲、林直道訳編『マルクス資本論第一巻フランス語版』131頁）。

ところがエンゲルスが新しく校訂して出版した第Ⅲ版、あるいは第Ⅳ版、そしてそれを受けた現行版では、直接西ヨーロッパに關説する記述は消えて、ほぼ初版の形に戻っているようにみえる。

ちなみに、初版と現行版の当該箇所を掲げてみよう。

【初版】「分離過程の歴史の中で歴史的に画期的なものは、多数の人間が突然にしかも暴力的に彼らの生活手段及び生産手段から引き離されて、社会から葬られたプロレタリアとして労働市場に放り出される、その瞬間である。労働者からの土地収奪が、全過程の基礎を形成している。だから、われわれはこの収奪を考察しなければならない。この収奪の歴史は、国がちがえばちがった色合いをもっており、まちまちな順序でまちまちな段階を通る。典型的な形態をとるのはイギリスだけであって、だからこそ、われわれはイギリスを例にとることにする」(江夏美千穂訳『初版資本論』811頁)。

【現行版】「本源的蓄積の歴史のなかで歴史的に画期的なものといえば、形成されつつある資本家階級のために横杆として役だつような変革はすべてそのようなのであるが、なかでも画期的なのは、人間の大群が突然暴力的にその生活維持手段から引き離されて無保護なプロレタリアとして労働市場に投げ出される瞬間である。農村の生産者すなわち農民からの土地収奪は、この全過程の基礎をなしている。この収奪の歴史は国によって違った色合いをもっており、この歴史がいろいろな段階を通る順序も歴史上の時代も国によって違っている。それが典型的な形をとって現れるのはただイギリスだけであって、だからこそわれわれもイギリスを例にとるのである(国民文庫版『資本論』③, 361-2頁)。

上に見たように、本源的=原始的蓄積過程はイギリスと同様に少なくとも西ヨーロッパで、一様ではないにしても継続して起こりうるだろうとマルクスはもともと考えていたようだ。ただ確かに西ヨーロッパと限定して書いているのはフランス語版だけだが、ほかにどこを想定できるだろう。それにしても両者の違いに、のちの研究者が関心を抱くのものにも無理からぬものがあるともいえる。だから、この点でのフランス語版の表現の違いに注目するだけでなく、マルクスの「修正」とみる見方さえもでてくる。和田春樹氏は、「ドイツ語第一、第二版では、『農村生産者、農民からの土地収奪は全過程の基礎をなす。この収奪の歴史は、国が異なれば異なる色彩をおび、また、順序を異にし歴史的時代を異にする相異なる諸段階を通過する。それはイギリスでのみ古典的形態をとるのであって、だから吾々はイギリスを例にとるのである』とあったところを、フランス語版では、『資本家の制度の根本には、それゆえ、生産者と生産手段の根底的分離が存在する。……この発展全体の基礎をなすのは農耕者の収奪である。これが徹底的に遂行されたのはさしあ

たりイギリスにおいてだけである。……しかし、西ヨーロッパのすべての国々も、これと同一の運動を経過する』と修正したのであった。この含意は、イギリス的な土地収奪の道は西ヨーロッパの諸国に限定される。即ち、東ヨーロッパ、ロシアには別の道がありうることを言わんとするところにある」(和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』勁草書房1975年、65頁。なお……は和田氏による省略)と。しかしその問題は、後述するように、初版の「序文」を見ても、フランス語版で初めて意識されたわけではないだろうし、逆にロシアの問題にまで意識に上るにはまだ至っていなかったのではないか。彼が『資本論』初版刊行の際につけた「序文」の中で、イギリスに起きたことはドイツ人にとって他人ごとではないぞ、と述べていることはよく知られている。ただ、ドイツといっても旧プロイセンが西ヨーロッパという表現に馴染むかどうかさえ問題であるかもしれないが……。それは別として、マルクスはさらにこういつている。「資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的な敵対関係の発展度の高低が、それ自体として問題になるのではない。この法則そのもの、鉄の必然性をもって作用し自らをつらぬくこの傾向、これが問題なのである。産業の発展のより高い国は、その発展のより低い国に、ただこの国自身の未来の姿を示しているだけである」(国民文庫版『資本論』①, [第I版序文] 23頁)と。ここでは資本主義経済の発展に伴う資本主義の「原理」の一般的性格が述べられているのが特徴のようだ。当然イギリスで通用しているその原理はドイツでも、あるいはフランスでも、それぞれの国の資本主義経済の発展によって、やがて通用するようになるというのが当時のマルクスの理解であろう。その点はフランス語版では強調されていない。ドイツ語の初版でも現行版でも、理論化のための典型国としてのイギリス限定がフランス語版より強く出ているようにも読めるのに対して、フランス語版では、その原理的規定が一般化する以前の歴史的過程に注目して叙述されているためとみるべきであろう。視点の置き方がやや違う。

そこに1881年になって、ロシア的な土壌の上に資本主義的な歴史段階がどのように形成されるのか、その点を鋭く質問するザスーリッチの問題意識に対応する形で、西ヨーロッパとは違う歴史的発展の経路があるかもしれないというマルクスの数年前から芽生えていた新しい問題意識が重なったとみることができるのではないか。実際、マルクスは、フランス語で書かれたザスーリッチの手紙への返信のための最初と二番目、三番目の草稿、およびその返信のそれぞれの冒頭で、自らの『資本論』フランス語版の叙述を引用して、それとの関係性に触れ

てはいるが、直接の関係は否定している。もちろんザスーリッチの問題意識自体は十分理解できている。そこではロシア農村共同体の特殊性は、それがロシアの資本主義的発展と同調的であるためと考えているようだ。特殊な歴史的発展の段階に起因するものだという事だろう。詳しくは後述するつもりだが、ただ注意すべきは、フランス語版の出版が1872年からであったのに対し、ザスーリッチからマルクスが質問状を受け取ったのは1881年であり、かなりの年代の隔りがあり、その間にマルクス自身のロシア研究が進んだという事実を考慮すると、『資本論』の各版でイギリスや西ヨーロッパに触れた先の問題は、はじめからきわめて抽象的な方法的次元の問題でしかなく、ロシア問題とは直接関係なかったということであろう。

だから、ここで宇野弘蔵の学説を借りて言えば、『資本論』ドイツ語初版及び第Ⅱ版以降、現行版に至る版での表現が、各国の対比において『資本論』そのものの原理的側面に留意を促しているのに対して、フランス語版では資本主義の成立にかかわる歴史的過程をいわば段階論的な次元での問題にも関わらず、しかもそれを一国の単線的な展開としてではなく広く世界的な歴史の流れの中で、世界資本主義の動きの中で、それに規定される後進的な国との関係をも含めて、具体的に位置づけようとしているとも考えることができよう。そしてさらにザスーリッチへの返信の下書きに見られるマルクスの革命の前提条件の理解は、いわば現状分析の範囲に属するものと読むことができる。

実際、興味あるのは、話が単に『資本論』の初版、現行版とフランス語版との内容の部分的な違いということから、ザスーリッチからの手紙に対するマルクスの反応、つまりザスーリッチへの返信のための準備草稿のことに転じると、今度は、全く新しいマルクスの課題が見えてくるということなのだ。ザスーリッチ自身のマルクスへの問いかけを超えた、ロシアの「農民共同体」の特殊性からそのまま共産主義社会への移行する可能性が導き出されて議論されることにさえなってくるからである。

林氏も指摘していることだが、ロシア語訳の『資本論』を読んでマルクスに「わが国の村落共同体のありうべき運命について、また世界のすべての国々が資本主義的生産のすべての段階を経過することが歴史的に必然的だという理論について、あなたがご自分の考えを説明してください。あなたなら、われわれにとってどんなに大きな助けになるか」（ザスーリッチのマルクスあての手紙より、『マルクス＝エンゲルス全集』⑩、599頁）という質問状を寄せたロシアのナロードニキの女性ザスーリッチに対して、マルクスが答えた文章の下書きの中に、西ヨーロ

パの国々におけるようにかつて存在し、やがて封建社会で消滅した共同体所有が、当時のロシアのように農村共同体の発達した国ではまだ残っているということ、そのことから資本主義への歴史的な発展の経路にはイギリスや西ヨーロッパの国々とは違った別の道があってもいいのではないかとというような内容の回答をするだけでなく、そこから話はどんどん過激な展開を見せるようになる。そういう下書きが第1稿、第2稿、第3稿と次第に内容が整理されながら残っていて、そういうことがフランス語版『資本論』の叙述との関係で研究者によって問題にされている点が注目されるのである。

4

ザスーリッチの問題に深入りしすぎることになるかもしれないが、もう少しだけ続けることにする。なお、付言しておけば、淡路憲治『マルクスの後進国革命論』（未来社、1971年）の第3部「晩年のロシア革命論」でも指摘しているように、ザスーリッチに関する話題より前に、マルクスのロシアに対する新しい知見はすでに1877年の「『祖国雑記（オテーチェストヴェンヌイェ・ザビスキ）』編集部宛の手紙」の中にある程度明らかにされている。その手紙は1877年10月に前記の雑誌に「カール・マルクス」という評論が掲載された直後に執筆されたようだが、送付されず、マルクスの死後、その遺稿からエンゲルスに発見されたのち、公開されたものだ。（『マルクス＝エンゲルス全集』⑩、114-7頁）。ザスーリッチへのマルクスの返信原稿とすこぶる関係ある問題をめぐる話で、しかもザスーリッチに宛てるために書いた返事の下書きの内容とは、結論的には逆の方向を、マルクスが指し示していると思われるもので興味深い。あらかじめそれを紹介しておくことにする。（なお手紙は短いものなので引用頁をいちいち記すことは煩雑のため省略した。）

マルクスは自らを論評した論者が、その中でロシアの著名な批評家チェルヌィシェフスキーの問題提起に基づいて、「ロシアは、その自由主義的経済学者が望んでいるように、農村共同体を破壊することからはじめて、その後資本主義制度に移行しなければならないのか、それとも逆に、ロシアは、この資本主義制度の苦しみを味わうことなしに、自己の固有な歴史的諸予見を発展させていくことによって、資本主義制度の全成果をわがものにするのでいいのか」と。彼は、後者の解決方向に賛意を表明しています」と、と整理した上で、マルクスはそれが双方に根拠を与えているかもしれないので、推測に任せず、「率直に述べましょう」として、二つの道への選択について到達した結論を次のように述べる。す

なわち、「もしもロシアが1861年以來歩んできた道を今後歩み続けるならば、ロシアは、歴史がこれまでに一国民に提供した裁量の機会を失ってしまい、資本主義制度の宿命的な有為転変のすべてにさらされることになるであろう」と。マルクスが『資本論』の原始的蓄積論で説いたのは、「西ヨーロッパにおいて資本主義的経済秩序が封建的経済秩序の胎内から生まれてきたその道を跡付けようとするものであり」、もしロシアがその資本主義の方向を目指すならば、その時には、「ロシアは、あらかじめ農民の大部分をプロレタリアに転化することなしにはそれは成功しないであろう」と。ただ問題は、マルクス自身がこの道を求めてはいないことだ。つまりここでマルクスは、新しい別の道を選択する可能性を捨ててしまっているわけではないのだ。マルクスは続けてこういっている。「しかしこれでは、わが批評家にとっては足りないのです。西ヨーロッパでの資本主義の創生に関する私の歴史的素描を、社会的労働力の生産力の最大の飛躍によって人間の最も全面的な発展を確保するような経済的構成に最後に到達するために、あらゆる民族が、いかなる歴史的状況のもとにおかれていようと、不可避免的に通らなければならない普通の発展過程の歴史哲学的理論に転化することが、彼には、絶対に必要なのです」と。そしてローマ史の経験に徴しながら「著しく類似した出来事でも、異なる歴史的環境のなかで起きるならば、全く異なる結果をみちびきだすのです。これらの発展のおおのおおを別個に研究し、しかる後に、それらを相互に比較するならば、人はこの現象を解く鍵を容易に見出すであります」との希望を明かしている。当時のロシアの歴史的現状の分析がここでマルクスの政治的判断に影響しているのであろう。3年ほど後になるザスーリッチへの提言とは色彩が違っているのは、二つの道のいずれを選択するかの問題であり、そこでマルクスのロシアの政治的経済的状況からする分析と判断が、その対象認識の違いとなって表れたのであろう。のち、淡路氏によれば、エンゲルスのこれらの書簡に対してもった印象も、またそのようなものであったと想像できるのである。

さて、以上を前提したうえで、ザスーリッチの問題に戻ろう。

マルクスはザスーリッチへの手紙の返事のために四つまで下書きを書き、その4番目の下書きと同文のものを返事としてザスーリッチに送ったといわれているが、それはあとで示すように、もっとも短く内容のないものである。含蓄に富んだ言葉はあるが、それだけでは、はなはだ抽象的な表現でしかない。そしてそこで暗示されて

いることの詳しい内容は、むしろ下書きの、第1稿、第2稿、第3稿の方に詳しく描かれているし、内容的にも書きながら拡大し、整理しながら展開しているようにも見える。したがってその含蓄はそのままで詳細を知らないザスーリッチには十分には通じていないと思われるのだが、例えば次のように書かれている内容はどうであろうか。下書き第1稿からだが、一部引用してみよう。

「歴史的見地からみて、それをいっそう発展させる道をつうじて『農耕共同体』を維持するうえできわめて有利な事情は、たんにそれが西洋の資本主義的生産と同時的に存在しており、したがってまた、資本主義的生産の活動様式に縛られることなしに資本主義的生産の諸結果をわがものにする事ができるということだけではなく、また、この『農耕共同体』が、資本主義的制度のまだ無傷であった時代をとおこして生きのこったということ、それどころか、現在、資本主義制度は西ヨーロッパにおいても合衆国においても、労働者大衆とも科学とも、またこの制度の生みだす生産諸力そのものとも、闘争状態にあるのを、一言でいえば、それが危機のうちにあるのを、『農耕共同体』がまのあたりにしているということである。その危機は、資本主義制度の消滅によって終結し、また、近代社会が集团的な所有および生産の『原始的な』型のより高次な形態へと復帰することによって終結するであろう」(『マルクス=エンゲルス全集』⑩, 392-93頁)と。

これは当時の資本主義の危機的状況の中では、ロシアの「農村共同体」からさえも政治的实践を通じて、共産主義社会への飛躍すら考えられるという夢をも語っていると読むことができる。

あるいは、また、これはどうであろうか。

「理論的にいえば、ロシアの『農村共同体』は、自己の基礎である土地の共同所有を発展させることによって、さらに、これまたそこにふくまれている私的所有の原理を除去することによって、自己を維持することができる。それは、近代社会が指向している経済制度の直接の出発点となることができる。それは自殺することから始めないでも、生まれ代わることができる。それは、資本主義的生産が人類を豊かにした諸結果をば、資本主義制度を経過しなくても、手に入れることができる。この資本主義制度は、その可能な存続期間の見地だけからみても、社会の生涯のうちではほとんど物の数ではないのである。だが純粹理論からロシアの現実に降りていく必要がある(同上, 394頁)」。

これもかなり激しい物言いである。彼はこのすぐ前で、こういうことも述べている。

「したがって、全般的な蜂起のただなかでの、この『農

村共同体』の孤立、共同体の生活と他の諸共同体の生活との結びつきの欠如、一言で言えば『農村共同体』にいったいの歴史的創意を禁圧しているその局地的小宇宙性が、打破されるのである」(同上)と。

マルクスは理論的な必然論は避けているのである。マルクスは「純粹理論」とか「理論という言葉をししばしば使っているが、それは現実と離れた抽象的な可能的な把握という意味で多分使用されているものと思われる。共産主義への期待と移行の可能性について語りはするが、それは一定の外部的環境を必要とするということを描きたいのだろうと想像する。結局、そのことの暗示が、ザスーリッチへの返事の内容になっている。したがってこれがマルクスの確定的な考えであるということよりも、その可能的な条件を問題にしたかったように思われる。

実際、下書きの第2稿になると、抑制的な記述が次第に目立ってくる。はじめはむしろザスーリッチなどの疑問に応じる形で言う。つまり西ヨーロッパの例でマルクスがロシアに与えたものと違う論拠で引き出せる結論は次のものだという。「すなわち、ロシアに資本主義的生産を確立するためには、まずもって、共同体的所有を廃止して、農民すなわち人民の大多数を収奪することから始めなくてはならない、ということである。なお、このことはまた、ロシアの自由主義者たちの願望でもある。彼らは、資本主義的生産を彼らの国に移植することを望んでおり、したがって、当然に、農民の大多数をたんなる賃金労働者に転化させることを望んでいるのである」(同上、399頁)と。ただそのためには、ロシアの「農民共同体」という「共産主義的所有」があらかじめ廃止されていなければならないが、西ヨーロッパでそれが実現できたからロシアでもそれが可能と言い切れるのかと問う。もしロシアが世界で孤立していたならば、そしてロシアが独力で経済的諸成果を作り上げなければならないとすれば、ロシアの進歩的發展とともに、その共同社会は死滅するだろうとマルクスは言う。しかしロシアはその共同体的所有を全国的な規模でもち、しかも近代的な歴史的環境の中に存在して、資本主義の支配する世界市場とも結び付けられているという現実がある。だからロシアは、「いまなお原始的な形態を破壊するのではなくて、それを発展させ、転化させることができるのである」(同上、401頁)と。そして「もしも、ロシアにおける資本主義制度愛好者たちが、このような組合せの可能性を否定するならば、ロシアが機械を利用するようになるために機械制生産の孵化期を経過せざるを得なかったということ、彼らに実証してもらいたいものである」(同上)と言い切る。

しかしこれは実は問題の半面ではない。「ロシアの

共同体が属している原始的な型は、内的な二重性を自己のうちに秘めている」(同上、402頁)ということだ。ここからマルクスは、そのような期待は「一定の歴史的諸条件があたえられれば、この型の没落、《その解体》をもたらすものであることに、だれしも目をおおすることはできない」(同上、402頁)というのである。そして「もとより、いまここで問題にしているのは、共同体をその現在の基礎の上で正常な状態におくことから始まる漸進的な改革のことだけである」(同上、403頁)とするマルクスは、「国家の仲介によって、農民の負担で養われているある種の資本主義が、共同体に対峙している。この資本主義にとっては、共同体を押しつぶすことが利益なのである。さらに、多少とも生活にゆとりのある農民を中農階級に仕立てあげ、そして貧しい耕作者—すなわち大多数—をたんなる賃金労働者に転化することは、地主の利益なのである。これはたやすい仕事というものである。国家の《租税》苛斂誅求によって打ちひしがれ、商業によって略奪され、地主によって搾取され、高利によって内部から掘り崩された共同体が、どうしてこれに抵抗できるであろうか」(同上)、と問い詰め、最後にこう述べて、この下書きの第2稿を終えるのである。すなわち、「ロシアの共同体の生活をおびやかしているもの、それは、歴史的宿命性でもなければ、理論でもない。それは、国家による抑圧であり、また、この同じ国家が農民の負担と失費において強大にしてきた資本主義的侵入者による搾取である」(同上)と。

マルクスが問題の二重性にこだわっていたことが分かるのではないか。一方で特殊なロシアの「農業共同体」からの共産主義社会への着地の可能性、そしてその夢を現実に押し殺すロシア政府、および世界の資本主義と連携するロシアの新興資本主義勢力の現実的な壁、これをどう考えるか、という問題である。マルクスといえども簡単に結論を出せる問題ではなかったであろう。

なお、マルクスは第3稿も残している。第3稿は、それ以前のものとは比べれば、短くまとめられているが、内容は結局、第1稿から第2稿への流れの上であり、ロシアの問題がヨーロッパの場合、私的所有の一つの形態から他の形態への転化が問題なのに、ロシアでは、共同所有を私的所有に転化させることが問題になっているので、「その転化の宿命性を肯定するにせよ否定するにせよ、賛否いずれの論拠も、資本主義制度の創生にかんする私の分析とはなんのかかわりもない」(同上、404頁)ということから出発しつつも、結局は従来の展開と同じように、「ロシア農民共同体」の性格の二重性の問題に帰着させ、その内容の特徴をあげることで、はっきりした方向を指し示すことはなかったのである。

第4稿あるいはザスーリッチへの返信を除くと、マルクスがそれぞれの下書きの中で、さまざまに思考を巡らせていることが分かって極めて興味深い。『マルクス＝エンゲルス全集』の注釈者は、全体として「ロシア農民の村落共同体と農業生産の協同組合的形態とについての深遠な概説になっている」(『マルクス＝エンゲルス全集』⑱, 599-600頁)と要約しているが、上に引用したように、マルクスはさらに、ロシアの『農村共同体』からの、直接、共産主義社会への移行すら想像しているほどなのだ。ただそれはマルクスの思考実験であると考えた方がよいであろう。

実際にも、なぜかザスーリッチへの返信は極めてあっさりとして片付けている。すなわち、マルクスは「公表に備えた簡潔な説明」が難しいことを断ったうえで、自らのフランス語版『資本論』からの引用に続き、ただこうなのである。——「ですから、『資本論』であたえられた分析は、農村共同体の生命力を肯定する理由も、否定する理由も提供してはおりませんが、しかし、私がおこなった特殊研究、しかも原資料にあたって材料を調べた特殊研究によって、私は、この共同体がロシアの社会的再生の支点だと確信するようになりました」(『マルクス＝エンゲルス全集』⑳, 136-37頁)と。そしてただ「それがこのように作用することができるようになるのには、まずもって、あらゆる方面からそれに襲いかかってくる有害な影響をとり除かなければならず、次には、それにたいして、自然発生的発展の正常な諸条件を保証してやらなければならないでしょう」(同上)と極めて慎重な態度なのである。

このザスーリッチへの手紙ないしその下書きとフランス語版『資本論』の叙述に見られるイギリスと西ヨーロッパへの限定的な資本主義の歴史的発展傾向との関連を、林直道氏は強調し、「この《西ヨーロッパの他のすべての国々も、同じ過程を経てきている》の一句は重要な歴史的意義をもっている」(林『フランス語版資本論の研究』247頁)と述べ、さらに「右のフランス語版の一句が、この問題の研究上重要なかわりをもつことの指摘にとどめたい」(同上248頁)と、するのであるが、しかしエンゲルスはこのフランス語版におけるマルクスの補筆は第Ⅲ版では採用しなかったのだ。そしてエンゲルスがとくにそのフランス語版の違いにとらわれていなかったとしても、マルクスの道筋をたどってみれば、エンゲルスがフランス語版の加筆を大きな変更の問題にしなかったことが間違っているようには見えない。初版の「序文」を見ても、フランス語版の叙述を読んでも、両者の間にマルクスの中で決定的な認識の変化があったようには思えないのだ。あるとすれば、先にも述べたように、

資本主義の原理の話と、その前提としての資本主義の成立に至る様々な歴史的経路の話と、分けて考えれば別に何の問題もないように思う。さらにその先に展開されたロシア『農村共同体』から共産主義社会への道は、エンゲルスにとっては、その問題を考える中で一時の夢として、あるいはその可能性として、現れたものと考えておいたのであろう。もちろんその内容そのものは極めて興味あるものだ。マルクスとエンゲルスとの会話の中では当然そういう問題も話題になったとは思いうし、現実には、マルクスはエンゲルスとともに『共産党宣言』ロシア語第Ⅱ版「序文」をほとんどザスーリッチへの手紙の返信を書いたすぐ後に執筆し、次のように述べている。

「ロシアでは、資本主義の思惑が急速に開花し、ブルジョア的土地所有がようやく発展しかけているその半面で、土地の大半が農民の共有になっていることが見られる。そこで、次のような問題が生まれる。ロシアの農民共同体は、ひどくくずれてはいても、太古の土地所有形態制の一形態であるが、これから直接に、共産主義的な共同所有という、より高度の形態に移行できるであろうか？それとも反対に、農民共同体は、そのまえに、西欧の歴史的発展でおこなわれたのと同じ解体過程をたどらなければならないのであろうか？

「この問題にたいして今日あたえることのできるただ一つの答えは、次のとおりである。もし、ロシア革命が西欧のプロレタリア革命にたいする合図となって、両者がたがいに補いあうなら、現在のロシアの土地所有制は共産主義的発展の出発点となることができる」(『マルクス＝エンゲルス全集』⑱, 288頁)。

共著の「序文」をどちらが書いたのかは分からないが、両者に意見の相違がなかったことは示されている。ただエンゲルスとしてはかなり踏み込んだ叙述であるように感じられるが、この「序文」はほぼマルクス「自身のロシア論の要約であり、再現であったといえよう。しかし、エンゲルスについては、マルクスの場合とは異なって、ある程度マルクスに妥協した結果として、この共同署名者となっているのではないか」(前掲書、306頁)と述べているのは淡路氏である。なお淡路氏はマルクスとエンゲルスとのこの問題について関係を前掲の著書の第九章「マルクス死後のエンゲルスのロシア像」で詳しく扱っている。

ところで、ザスーリッチに宛てる手紙の下書きは長い間知られることなく、ラファエルグのところ保管されていたようだが、1911年にリャザーノフによって発見され、1923年になってロシアから追放になっていたメンシェヴィーキーのニコラエフスキーからザスーリッチへのマルクスの手紙の所在が明らかになった。ニコラエフ

キーはその手紙を、『ロシア革命運動史資料』第2巻に翌1924年発表したという。ザスーリッチの手紙への返信のためのマルクスの下書き原稿は『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』のロシア語版第1巻に、続いてドイツ語版第1巻に掲載された。なお、ザスーリッチの手紙とその返信についてのマルクスの下書きの来歴などについては、先にも挙げた和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（勁草書房1975年）が詳しい。同書165頁以下、参照。

さて、ザスーリッチへのマルクスの返事の下書きの文章をエンゲルスがマルクスの遺稿の中から見つけて読んでいたかどうかはもちろん分からない。ただそれを目にしていたとしても、それが『資本論』第IV版以降のエンゲルスの校訂作業に影響することはあり得なかったであろう。実際、マルクス自身にとってさえ、当時のヨーロッパの政治経済状況の激しい変化と加えてアメリカの激しい政治状況を見れば、どう解釈するにしても、その歴史的経路の考察になるといい切るのには、たとえその可能性だけを論じる場合であっても、相当難しい話になることは当然でもあるからである。

淡路氏の、「マルクスの死後、なお十数年を生きたエンゲルスからすれば、『祖国雑記』編集部あての、1877年のロシア論は、当時の政治情勢によって一方的に影響された結果のものであり、その時以来、資本主義も農民共同体の解体も長足の進展をみせた1894年のロシアについては、マルクス生前の時期とは当然異なったかたちで分析されねばならない、というのがエンゲルスの見解なのである」（同上、265頁）というのは至言であろう。根本的な理論書である『資本論』の編集作業におけるエンゲルスの慎重さが、むしろそこでは際立っているとさえ思える。

この問題はこれで打ち切って最後にもう一つ、フランス語版をめぐる話題を提供して終わりにしたい。

5

先に、マルクスの死後、エンゲルスが刊行した『資本論』第III版に付したエンゲルスの言葉から引用したが、エンゲルスはそこだけでなく、マルクスの生前、フランス語版が刊行されてから何度か、フランス語版に対する印象を手紙でマルクスに伝えている。その印象は決して芳しいものではなかったが、興味深いのはフランス語版への批判的言辭がその内容ではなくドイツ語やフランス語の表現ないしその語感をめぐっての話であるように見えることが多いことだ。ドイツ語、フランス語、英語など各外国語の語感の違いまで論じられても、もちろん私などにはついてゆけない。なるほどとも思ったが、それ

とはまったく別に、細かなことではあるが私の新しく気づいたこともあった。

それはわりに最近のことである。私は数十年前から続けて今でもたまに開いている研究会があるが、そこに中川辰洋君という大学院に入る前から加わってくれている仲間がいる。現在は青山学院大学の教授で定年近い。その彼が近著の『チュルゲーとアダム・スミス』について自ら報告してくれたことがあった。彼は専門は現代ヨーロッパの金融事情なのだが、もう一つの専門技としてこの何年か連続してフランスの古典的な経済学者の極めて精緻な文献学的考証学的な研究書を何冊も出している。

その折に、直接は研究の主題に関係はなかったのだが、彼がフランス語版の『資本論』に触れ、関連して、日本で手に入る『資本論』の翻訳のどれを見ても、最終的だと言われるフランス語版の指示通りには直っていないと思われるけれども、それはなぜか、と私に質問したのである。そして意表を突かれたのは、それが最後の蓄積論からではなく、最初の方の第1篇第1章第4節「商品の物神性とその秘密」のある箇所を指摘されたからだった。問題の箇所は、いわゆるマルクスのロビンソン物語と呼ばれるところで、孤島で一人過ごすロビンソンが日々必要なものを一日の労働を分けて作り出すことが、人間の社会生活においても同じであることを説明しているところなのであるが、現行ドイツ語版『資本論』の国民文庫版訳によると、「いっさいの関係はここではまったく簡単明瞭なので、たとえばM・ヴィルト氏でさえも特に心を労することなくこの関係を理解することができたことであろう」（①、142頁）とある。ところがフランス語版では、「ロビンソンと彼の自製の富である諸物とのあいだの関係はことごとくきわめて簡単明瞭であって、ボードリヤール氏もとりわけ心を緊張させずにこのことを理解できるほどである」（江夏・上杉訳『フランス語版資本論』上、53頁）と、出てくる人名に違いがある。フランス語訳では訳者がカッコしてその人物を「ブルジョア経済学者」と説明している。ドイツ語の方は初版から現行版まで一貫して、同じ人物、M・ヴィルト氏である。私は質問を受けた時、幸いにもM・ヴィルト氏が当時のドイツでは誰でもが知る平凡な批評家で俗流経済学者であることを知っていたので、ヴィルト氏を知らないフランス人に同じような周知の平凡なフランスの評論家の名前を挙げてその理解を容易にしようとしたのではないかと、その場では回答したのだったが、その時、英語版やほかの翻訳ではどうなっているかな、ととっさに思ったのである。英語版はマルクスの死後、ムーアの翻訳でエンゲルスの手によって、第8篇に「原始的蓄積」

論を置いたように、まさにフランス語版を参照の上で1887年にロンドンで刊行されたものだったからである。家に帰って調べてみると、当該箇所はやはり別人であり、Mr.Sedley Taylorとあった(Karl Marx *CAPITAL*, Vol. 1, Moscow1954, Rep.on the text of the English edition of 1887, p. 77)。彼がどういう人物か、私はよく知らないのだが、エンゲルスの編集した『資本論』第IV版の発行に当たっての言葉の中で、グラッドストーンの言葉の引用をめぐる、マルクスの引用が誤りであったかどうかについてのエンゲルスの説明の中で批判されているイギリスの凡庸な評論家のようなものである。これらで分ったことは、各国の読者の理解を容易にする工夫が施されていることであって、その点ではマルクスはもちろんエンゲルス自身においても気持ちは同じであったということが想像できたのである。『資本論』の日本語訳は全てが単なる逐語訳だから、フランス語訳や英語訳のような読者の理解への対応や配慮の試みはないとしても、確かにここだけ日本人の名前を例えば、社会評論家としてその頃名高い「大宅壮一」など、向坂氏がヴィルト氏の代わりに入れてみたところで、マルクスの労働価値説の理解が増すとはとても考えられないであろう。そう思って改めて翻訳ということの限界と面白さを感じたのである。

6

話は戻るが、そうなる先フランス語版『資本論』に対するエンゲルスの批評はどう考えたらいいだろうか。その問題がまだ残っている。しかし、少なくとも内容的な問題があるとは思えない。エンゲルスはフランス語版が出た時に次のようにマルクスに手紙の中で書いている。「きのう僕はフランス語訳で工場立法にかんする章を読んだ。この章を洗練されたフランス語に移した手練には敬意を表しながらも、やはり僕はそれをこのみごとな章のためには残念に思う。力強さも活気も生命もなくなっている。平凡な文筆家にとっての、ある種の優雅さをもって自分を表現することの可能性が、ことばの強勢を代償として買い取られているのだ。このような現代の規則づくめのフランス語をもって思想を表すということは、ますます不可能になってくる。窮屈な形式論理のためにほとんど至るところで必要になってきた文章の置き換えによってだけでも、すでに叙述からいっさいの特異なもの、いっさいの活気あるものを奪い去っている。英訳のさいにフランス語訳を基礎にすることは、僕は大きなまちがいだと考えたい。英訳では原文の力強い表現が弱められる必要はない。固かな弁証法的な箇所やむをえず失われるものは、ほかの多くの箇所における英語

のより大きな力強さと簡潔さによって償われるのだ」(『マルクス=エンゲルス全集』③③, 82頁)と。

これに対してマルクスは翌日に出した返事の手紙の末尾に、「君はもう『資本論』のフランス訳を読み始めたのだから、それをもっと続けてもらえるとありがたい。ドイツ語版のなかにあるよりもましな箇所もいくつか見つかるだろうと思う」(同上, 84頁)と書き綴った。これに対して、エンゲルスは数日後、再び自らの感想を披歴している。すなわち、「フランス訳については、近いうちにもっと詳しく書くことにしよう。これまでに僕にわかっていることと言えば、君が書き改めたところは、たしかにドイツ語版のなかにおけるよりはよくなっているが、それはフランス語のせいでもドイツ語のせいでもない、ということだ。いちばんいいのは、ミルについての覚え書だが、これは文体についてのことだ」(同上, 86頁)と。なお、エンゲルスが後で詳しい批評をマルクスに手紙で書き送った証拠は残っていない。

ここでの議論の限りでは、主としてロアのフランス語訳自体について、ドイツ語の原文との感じ方の違いが論じられているように読める。そのような外国語の語感の違いについては、もちろん私は何も意見は述べることができない。ただマルクスとエンゲルスに内容についての大きな認識の違いはないように思う。内容的な修正はエンゲルスも認めているからだ。目的は各国の人々の感覚や常識に合わせて『資本論』の理解が進むようにしたいということだ。というのは、マルクス自身が次のようにフランス語訳について述べていたからである。すなわち、マルクスはロシア語版『資本論』の翻訳者であったニコライ・ダニエリソンに対してこのように語っている。「フランス語版は両国語の精通者の手になるものですけれども、訳者はやはり時として逐語訳に走りすぎます。ですから、フランスの読者に口当たりをよくするため、やむをえず数箇所をまるまるフランス語で書き直しました。この本をフランス語から英語やラテン語系諸国語に訳すことは、今後はそれだけ楽になるでしょう」(同上, 387頁)と。エンゲルスの考えとは少し違うような気もしないではないが、基本的には内容の問題はなく、その表現の容易さの問題なのである。ドイツ語版初版から第II版への変更でも例えば蓄積論の箇所などには、平易化という方向も見てとれるが、フランス語版への書き換えにもそういう箇所はより多く見られる。言葉の追加も内容に新しい何かを加えなければならないというのではなく、説明に新しい工夫を加えて理解を助けるためという感じである。文体の荘重さが減じるとしても、エンゲルスも認めていたことだと思う。その方向は先に挙げた英語版における人名の変更の例でもわかること

だ。だからそれはエンゲルスのドイツ語版の校訂作業の場合には、逆にドイツ人の読者にふさわしい表現に戻ってくるというわけだ。

実際、エンゲルスは自身の校訂した『資本論』第Ⅲ版の発刊に当たって付した前書きの中で、「文体について言えば、マルクスはいくつかの音節を自身で根本的に修正していた。そして、そのなかでも、またたびたびの口頭での示唆によっても、私が英語の術語やその他の語法からどこまで離れてもさしつかえないかについて、私に限度を示していた。追加や補足も、もしマルクスがやったならば、とにかくもっと手を加えて、なめらかなフランス語を彼自身の簡潔なドイツ語によって書き換えたことであろう。私はこの追加や補足をできるだけ元の本文に適合するように翻訳することで満足しなければならなかったのである」（『資本論』第Ⅲ版に付したエンゲルスの前書き、国民文庫版『資本論』①、47頁）と述べているのである。

ただここで一つだけ言い残しておいたことが実はある。それはフランス語に対するエンゲルスとマルクスとの間に理解力やそれに対して持つ語感の違いがあったかもしれないということだ。マルクスのフランス語の能力についてはかなり以前の著作である『哲学の貧困』（1847）がフランス語で執筆されていることでも分かるように疑問の余地はないと思われる。そのほかにもフランス語を使用することはしばしばあった。先に話題にしたザスーリッチへの手紙の返事の文章も、マルクスは全部フランス語で書いているのである。しかしそのマルクスにしても、イギリスに亡命してしばらくは必ずしも英語には堪能ではなく、生活の糧にしていたアメリカの新聞『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』への「通信員報告」執筆にも、はじめから18通まではすべてエンゲルスに執筆してもらい、その後マルクス自身がドイツ語で書いたものをエンゲルスに英訳してもらって新聞社に送付するようになったのであった。これらはもちろん全てマルクスの署名で、その秘密は厳重に守られたが、いずれも同じように好評でマルクスの評価を高めたのであった。二人の間の英語についての能力に当初に大きな差があったことは理解できないことはない。英語は若いころからイギリス滞在の長いエンゲルスにとってはほとんど母国語と言っていいだろう。他方、マルクスのフランス語についても、その実績から見て、フランス人の校閲を得る必要があるようなものではなかっただろう。ただエンゲルスは友人にこういう気になる言葉を残しているのである。——「このフランス人仲間だったら、もしマルクスなり僕が自分で書いたフランス語のものに署名させるなどというまねでもしようものなら、とんでも

ない大騒ぎを始めていたところだろうよ。僕たちにしたって、活字になるものを外国語で書いて、そのことを母国語とする誰かに校閲してもらわないですますほど、そんなに自信があるわけではない」（『マルクス＝エンゲルス全集』③、453頁）と。これはしかしマルクスのフランス語に、あるいはエンゲルスの英語に当てはまるのだろうか。大体、フランス人のロアのフランス語への翻訳に徹底的に手を入れたマルクスがこんなことを言うだろうか。ここでの話題はもちろん二人のフランス語の話であるが、二人のフランス語なり英語の論説、あるいは著書がその執筆された言語を母国語とする人の校閲を経ているとは考えられないのである。まして『資本論』の内容の校閲訂正の話である。扉に明記されているようにフランス人によってフランス語に訳されたものをマルクス自身がそのフランス語を校閲していたのである。ただ第Ⅲ版を新たに作り直す時に、マルクスが言い換えたフランス語表現をどうドイツ語の文章に再び移し替えてゆくかはエンゲルス自身の仕事であった以上、エンゲルスのフランス語版自体の理解はもちろん、フランス語の語感そのものの理解がマルクスと違っていたということはあるかもしれない。そういう事情がもしあったとすれば、マルクスのフランス語版『資本論』におけるフランス語の独特の表現や言い回しにエンゲルスが十分対応していなかった部分があったという可能性までは否定はできないのではないと思われるのである。エンゲルスに全く問題がなかったと言いきれないかもしれない。それは今後のより詳細な検討によって定まるであろう。ただ『資本論』の代表的な翻訳者である向坂逸郎先生あたりに、エンゲルスにたいして何ということを行うか、と大目玉を頂戴しようだが、残されたおびただしいマルクスやエンゲルスの書簡を読みながら、ちょっとそんな感想を持ったこともあえて付け加えておきたい。

7

エッセイはここで終わりにしてよいのだが、若干の余談を付け加えて終わることにしたい。現代アメリカを代表するマルクス経済学者である Kevin B. Anderson, は近年、*Marx at the Margins: On Nationalism, Ethnicity, and Non-Western Societies*, University of Chicago, 2010. (ケヴィン・アンダーソン著、平子友長監訳『周縁のマルクス』社会評論社、2015年) を出版して、マルクスがイギリスや西ヨーロッパの近代的な諸国の問題にのみ関心があったのではなく、それらの近代的諸国とそれと異質なロシアやアジアの国々との関係を主とする『周縁』(margins) の問題——「人種」、「ジェンダー」、「植民地主義」など——を同時に意識し、いかにそれらの問題

を自らの体系の中に位置づけようとしたかを明らかにしようとして注目されたが、そこでもフランス語版『資本論』に対する関心はとりわけ大きいように思われる。彼はフランス語版の出版以前と以後とは「理論的差異」(同上, 259頁)がある、とさえ述べているのである。アンダーソンはかなりのページを割いて、フランス語版にまつわる様々な話題を、リュベルをはじめ、アルチュセールやルフェーブルなどに至るまで、取り上げて論じているが、いずれへの関説も、フランス語版の最終版的性格の強調とエンゲルスがのちの改訂版であえて無視したマルクスのフランス語版における改訂の意義の重さを、過度に強調しようとするものであるといつてよいであろう。

ザスーリッチの質問に対するマルクスの対応がそこでは明らかに中心的な問題の発想のきっかけになっているように思われた。ロシア語版の『資本論』がいち早く出版されたことがあり、ナロードニキを通じるロシア社会主義者たちとマルクスとの接触が芽生えたこともあり、もともとロシアの農業共同体の独自の存在がマルクスに注目されていたという事情もあって、マルクスの唯物史観に則った封建社会崩壊と原始的蓄積の過程を経た資本主義への移行、そしてさらに社会主義社会へという定常とされる歴史的展開が、ロシアの場合、土地を私有する農業共同体から直接に共産主義への移行によって代置される可能性をも考えられるというところまでもマルクス自身の内部でめぐる思考の対象になっていたことは、すでに述べてきたように、確かだ。アンダーソンは、フランス語版におけるこの変化が「1867年から1875年におよぶこれらの変化の射程を示し、1867年版がむしろこの著作の未完成な初期段階にあったことを明らかにするのであろう」(同上, 259頁)とさえ述べているほどである。しかしフランス語版の『資本論』の一部の叙述の変化からはもちろんのこと、またそれから10年も隔てて行われたマルクスのザスーリッチからの手紙とその返

事および返事の下書き3通の内容からさえも、そのことを正確に推理するのはかなり難しいが、当のナロードニキだけでなくアンダーソン自身にとって問題がその上で大きく旋回していたことは確かだろう。実際、マルクスの思考はそこまで進んでいたからである。しかしザスーリッチへの手紙の下書きであればともかく、フランス語訳『資本論』の内容のわずかな改訂部分の叙述からだけでは、それをそれ以上考察することは無理であろう。少なくともその文中には、まだ新しいマルクスの思考の広がりは見られない。先述したように、フランス語版のその点での特徴は、マルクスが考察の視点をやや変えて述べたものにすぎないと思われるからだ。

確かにザスーリッチへの手紙の下書きの中で、マルクスは自らのフランス語版『資本論』の叙述の一部を引用して、関連づけを行っているが、マルクス自身にもその間にほぼ10年近い学問的な進歩があったはずだ。その時期のマルクス自身のロシア研究の進展ということもあって、1881年に返信のために書いた下書きに見られるような、あれほど張り巡らされた思考に展開を見せたのだ。それは、極めて刺激的であるけれども、しかし実際にザスーリッチに返された手紙では、抑制されごく抽象的な省察にとどまっているのである。文章化されていない私的なメモをあまり過大に評価するのも危険である。ただ、そのことも含めてこの問題への興味は尽きない。

しかしここでは、晩年のマルクスの「周縁」(margins)研究に対する最近の関心が大きな広がりを見せており、残された未発表のマルクスの「抜粋ノート」を含む諸資料の解読が進められることで、新しいマルクス研究が出現することが大いに期待されることを指摘するにとどめるしかない。

(なお引用した文献および参考文献については本文中に記載してある。)